

# つながることと切ること

コンゴ民主共和国、ボンガンドの声の世界

木村大治

京都大学大学院

アジア・アフリカ地域研究研究科

海外学術調査ワークショップ

『フィールドで「聞く」—フィールドサイエンスの可能性』

# ことのおこり: Field+



## つながることと切ること コンゴ民主共和国、ボンガンドの声の世界

木村大治 著者 | 元 | 京都大学大学院

フィールドとはさまざまな声や空間に響いている。それらに対する関係の取り結び方は、土地の人々それぞれが異なる。



トーキング・ドラム  
木村大治が撮影したボコラ。目下中央部のボコラは、スリットのある筒状の器で、筒の両端に皮の膜をはり、この両端の膜を叩くことで音を出す。この楽器の音はリスレカに響かせることで、音響に類似した「語り」を収録することができる。



### フィールドワーカーの感性

「聞く」というお話をいただいたわけだが、私は聴覚に関してあまりはなれぬ性を持っているわけでもない。感性が鋭すぎる、しほは日常生でしほいん疑念をするものである。こんな感じがある。京都大学理学部に入学したとき、数電一講義の駅の近くで、下宿という同級生がいた。ともに寝が好まなかった。ときどき彼の部屋に行くと話をした。しほよく疑って、彼が聴覚にとても鋭敏であることに気づいた。私の授業で、聴覚の音が気になると言われたこともあった。下宿のおばさんや似たようなことを書



ボコラを担いで歩く少年。村にはいると、少年はしゃべりながらの音響に反応。楽器は響かせておいたが、

ていた。彼は1年で他の下宿に変わった。——6年ほど前、思いがけずその名前を新聞上で見た。彼は最近たてアフリカに訪問作を完成している作家になっていた。京都大学卒、と経歴にあったので性別をたどってみると、僕の部屋に下宿していたあのK君だったのだ。小説家になるには、やはり何かと違う訓練が必要なのだが、と物に感心したものだ。私はというと、昔にはけっこう褒められる方である。1980年代から、ザイール（現・コンゴ民主共和国）に調査に入ったとき、定住ビザを取るために2ヶ月ほど、首都キンシャサのマンドンゴという地区に滞在していた。マンドンゴはアフリカ・ボツワナの境界線であるワランガ・ミュージックの中心地で、近辺でコンゴの音楽に聞かせる。彼らもあちこちのパーで、大音量の音が響いている。基木前に置かない可なりである。ボナム・マンドンゴに泊まった最初の夜、うるさくて眠れず、えらいところに来てしまったと後悔したが、3日経ったら慣れた。フィールドワーカーは訓練すべきない方がいいのである。

### ボンガンドの「声」

——そんな私が今でも慣れることのできないのが、コンゴ民主共和国の農村ボンガンドの人たちの声である。まず基本的に大声で喋ることが多い。その声がよく聴える。我々の耳からは考えられない「遠距離感」も可能となる。これは耳には、彼らの言語が強いというだけ、トーニングと異なり、単語や文における音の高さやリズムの区別に強くかかわっている言語のことである。だから、トーニングをうかがって聞かせる、書いていることがあった

く違つた意味になってしまつたりする。一方トーニングでは、音の高さだけでなく音程やリズムを通じて伝えることができる。ボンガンドには高い音と低い音の出る場所をもつ種々の楽器があるが、その高低の音の組み合わせで話し言葉のトーニングをなすことで、微妙な意味を伝達することができる。このための太鼓は「トーキング・ドラム」と呼ばれる。

声の遠距離伝達が可能であることにより、彼の発見は「話かきで聞く」「話かき」というアドレシク性がある。「話かき」な性格を帯びてくる。私は調査当時、理学研究科所属で、学位論文を出すために数ヶ月の女子大も集めたけれどなかったのだが、村の中心で聞こえる声の録音技術を用いた分析からは、量中ほどの録音も、50%の録音でなくとも一人の声が、そして50%の録音でなくとも二人の声が聞かえている。という結果が得られた。村は声に響いている。とくに夕方になり、人々が散歩や畑から帰ってくる。村の中はにぎやかになる。声を発してととえると、あちこちで聴えず花火が打ちあがっているようである。

しかし、丸くなる物音や音響ならば、私は別に平気なのである。慣れることができなかったのは向かいという、それはそうだった声による「遠距離感」がわり」とでも言うべきものだった。たとえはこんな具合だ。私は慣れるとはしほは距離感が離れて音を出すが、そんなとき音の響きを聞いて聴いて、外で大声で「ボンゴレ（現地語で白人のこと、日本人もこのカタゴリに入る）は書いていない」と言うのが聞こえる。よく子供が「ライオンやキリンなどを売りにくるが、たくさん買っているのではない」と言うとき、くると見ると村の中が向かう。「ア

チ、アチンゴ」（彼は知らないと言った）」と叫ぶ。私は「聞いておいてくれ」とつづつやがては失声した。また、村の真ん中の広場で大声で叫ぶ。彼らが「ボンゴレ」と呼ぶ特殊の発音形式も同様な権力を帯びている。ボンゴレでは重要な情報がアチンゴされることもあるが、その多くは、書いても書かなくてもいいような内容である。たとえば「誰は寝たか」とか、「うちの孫が学校に行きたがるか」とか。さらには「このごろおはかり切っている」（これはトーキング・ドラムによるボンゴレで語られる）といった意味のないような大声で語られるのである。「何でそんなことをこの時間かきられるのでもないんだ」とため息をついたものだった。たしかに聞かせるに比べて聞かされたい。しかし何が大変な事件の起こったかのように、大声で熱心に話している姿を覚える。私はどうしても眠らざるを得ない。そのような、いわば「インタラクション的」な感じが、私が今でも慣れることができない理由の一端にある。

なぜそんなところでいい内容をブロードキャストしなければならぬのか。それは今でも同じ理由のだから、それを考えている。近々おはかりの（とくにアフリカで文書など）でできるはずの音響的なことは書かない、書かない」というやり口の正当性の方が、逆に疑問に思えてくるのである。

### 無視することの技術

さて、彼ら自身はそのような音声に対してどのように対処しているのかという、それは書かれておらず「おとこを無視」である。村の中心ではしばしばカタゴリに入るが、それを聞く人の顔は無表情で、話し方を向くことさ



木村大治と、彼の発見の音響化した録音に出会った村の女性の一人。彼は「音響を聴いて」とつぶやくことがあつたので、彼女一人。

え少ない。私が「彼は何を書いているんだ」と尋ねても、ほとんどさうに「あれは彼が何を書いているんだよ」とどきどきと説明するのみである。調査の途中から気づいたのだが、そのような無限の態度を覚える。いちいちの発音を気にしては身が持たないのだから、社会学アウティン・ゴマンは「無視の無関心」という概念を提示したが、それを生活のなかでの部分で、あそこに行き止むのがボンガンドの文化である。（ボンガンドの発音について詳しくは別紙を参照してください）

最近、ボンゴレの話をするとよく言ってくるのが「それはインテリジェントのプロトタイプに似ているのではない」というコメントである。たしかに、書かなくてもいいような内容を「すべてをブロードキャストするわけではない」。それは多量な音響に響かせるというスタイルは、メディアの手段として同じである。それを敵んでも書かなくていいという同様に、それは身が持たないのだから、社会学アウティン・ゴマンは「無視の無関心」という概念を提示したが、それを生活のなかでの部分で、あそこに行き止むのがボンガンドの文化である。（ボンガンドの発音について詳しくは別紙を参照してください）

ボンゴレを語る老人。ヒノキカで使った録音機と音響化された音。録音機の中で老人が一人、大声で話している。



ボンゴレを語る老人

（邦訳）木村大治著『ボンゴレ』(jumbo.afrikayoko.uac.jp/~kimura/)の下部を撮影しているのが発音の音響化された音。

# 聴覚について

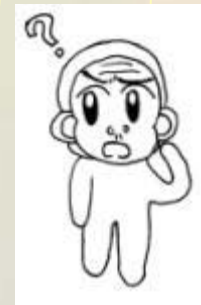
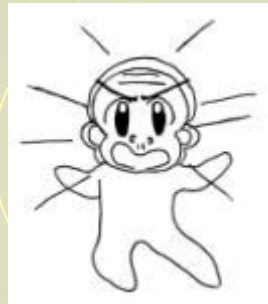
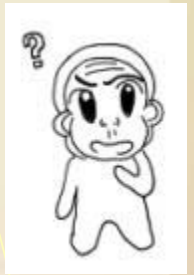
- ・ K君の話
- ・ キンシャサ, ホテル・マトングェにて
- ・ フィールドワーカーの感性？ あまり感じすぎるのも考えもの

# 物理的なうるささとインタラクティブ なうるささ

- ・ 「ピアノ騒音殺人事件」1974
- ・ 電車の中の携帯はなぜうるさいのか

# 切ることの大切さ: フレーム問題

- ・ すべての情報を受けとめてしまっても、やっ  
られない
- ・ 「フレーム問題」 McCarthy and Hayes (1969)
- ・ 私は誰とインタラクトしているのか (声の場合)



# ボンガンド

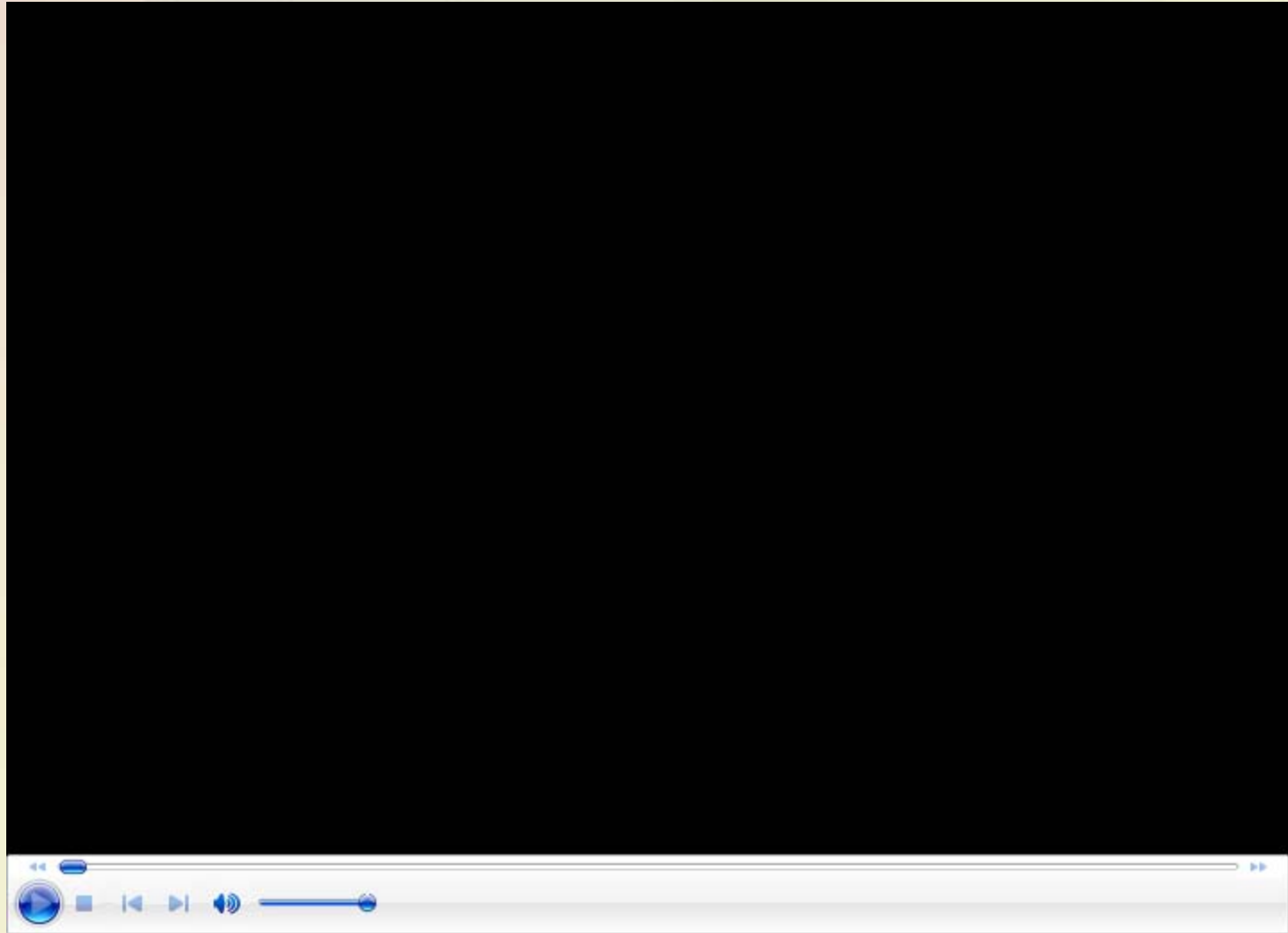
コンゴ民主共和国の焼  
畑農耕民

木村は1986年から調査  
1990年～2004年 内戦によ  
り調査中断

2005年から再開



# ボンガンドの「投擲的発話」(ボナンゴ)



# ボナンゴの形式

- ・ おもに中年から老年の男性によって発せられるが、女性や若者が語ってもかまわない
- ・ 短いものもあるが20～30分続くこともある
- ・ 数百メートル先まで届くこともある
- ・ 明示的な聞き手が見あたらないことが多い



# ボナンゴの内容

- ・ 情報伝達の
  - 「明日みんなで橋を修理しよう」
  - 「村の男が森で迷って帰ってこない」
- ・ しょーもない内容
  - 「うちの孫が学校に行きたがらない」
  - 「今日は暑すぎる」

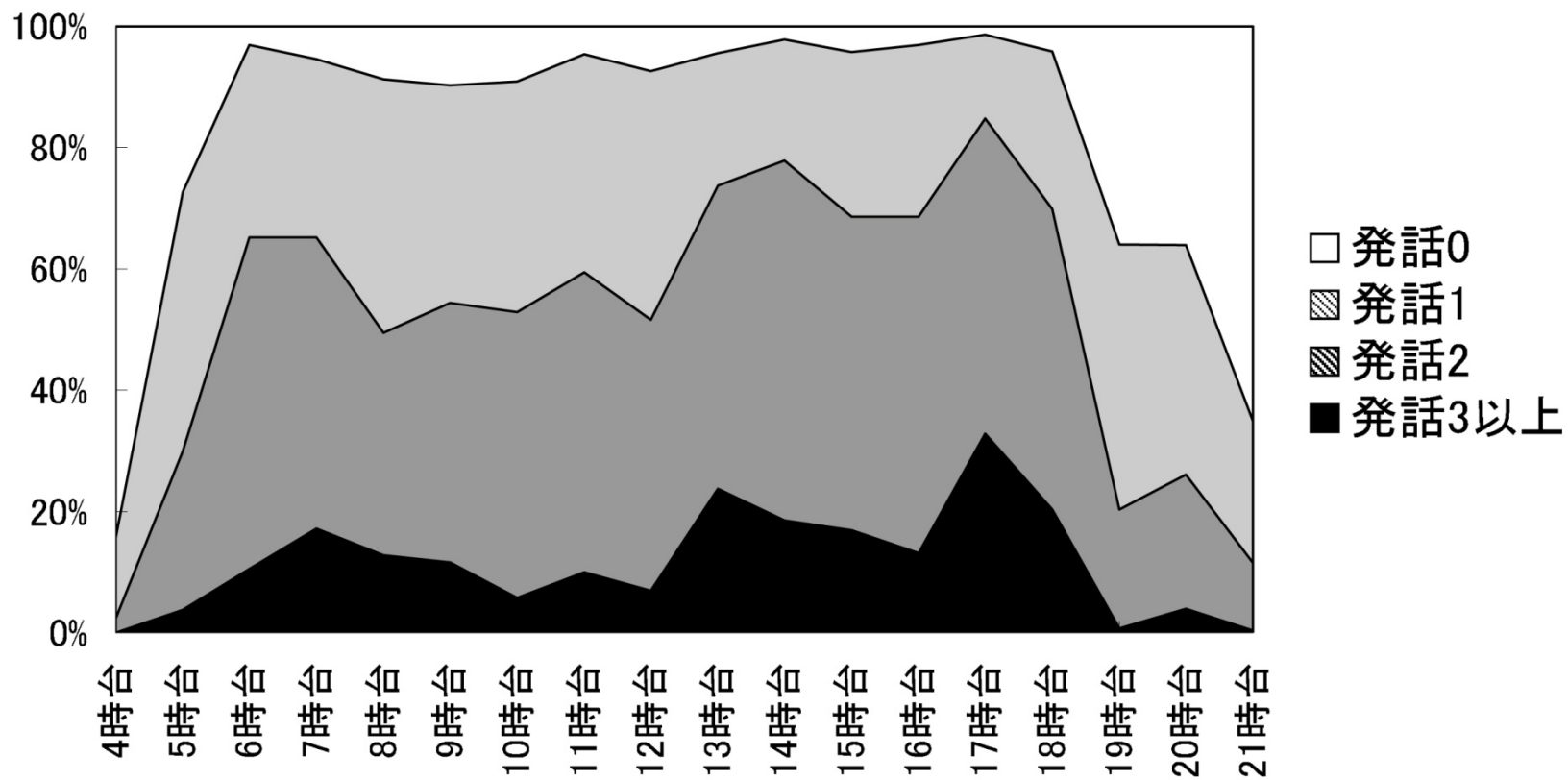
# ビデオで老人は何を語っていたか

ヤギが盗まれたという事件について語られている。語っている老人がバオーヘンダとアト一口タという二人の男から聞いた話なのだが、その二人はさらにその話を、ヤギが盗まれた本人A(名前不明)から聞いたのだという。

つまり老人は、二重の伝聞の話をしている。そのような当事者性の薄い話を、ここまで朗々と語れるとは…

# 声に満ちた村

## 発話密度の測定



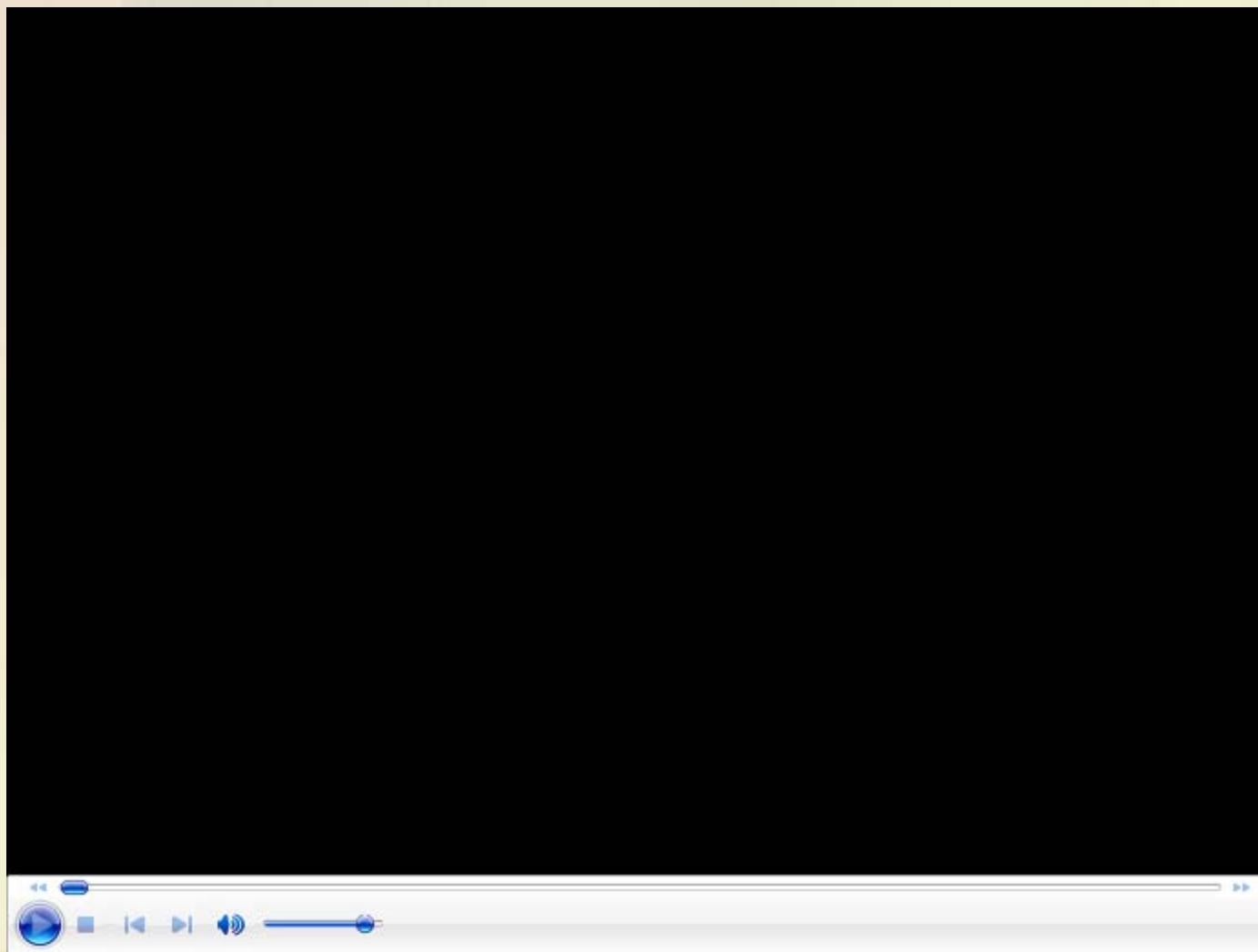
# 声による過剰なかかわり

- ・ 木村が熱を出し、家の窓を閉めて寝ていると、外で大声で「ボンデレ(白人)は寝ている!」と叫ぶ
- ・ 子供がパイヤやキノコなどを売りにくるが、いらないと言うと、くるりと振り向いて村中に向かって、「Ate, ahalange!(彼はいらないと言った!)」と叫ぶ
- ・ →「放っておいてくれ…」

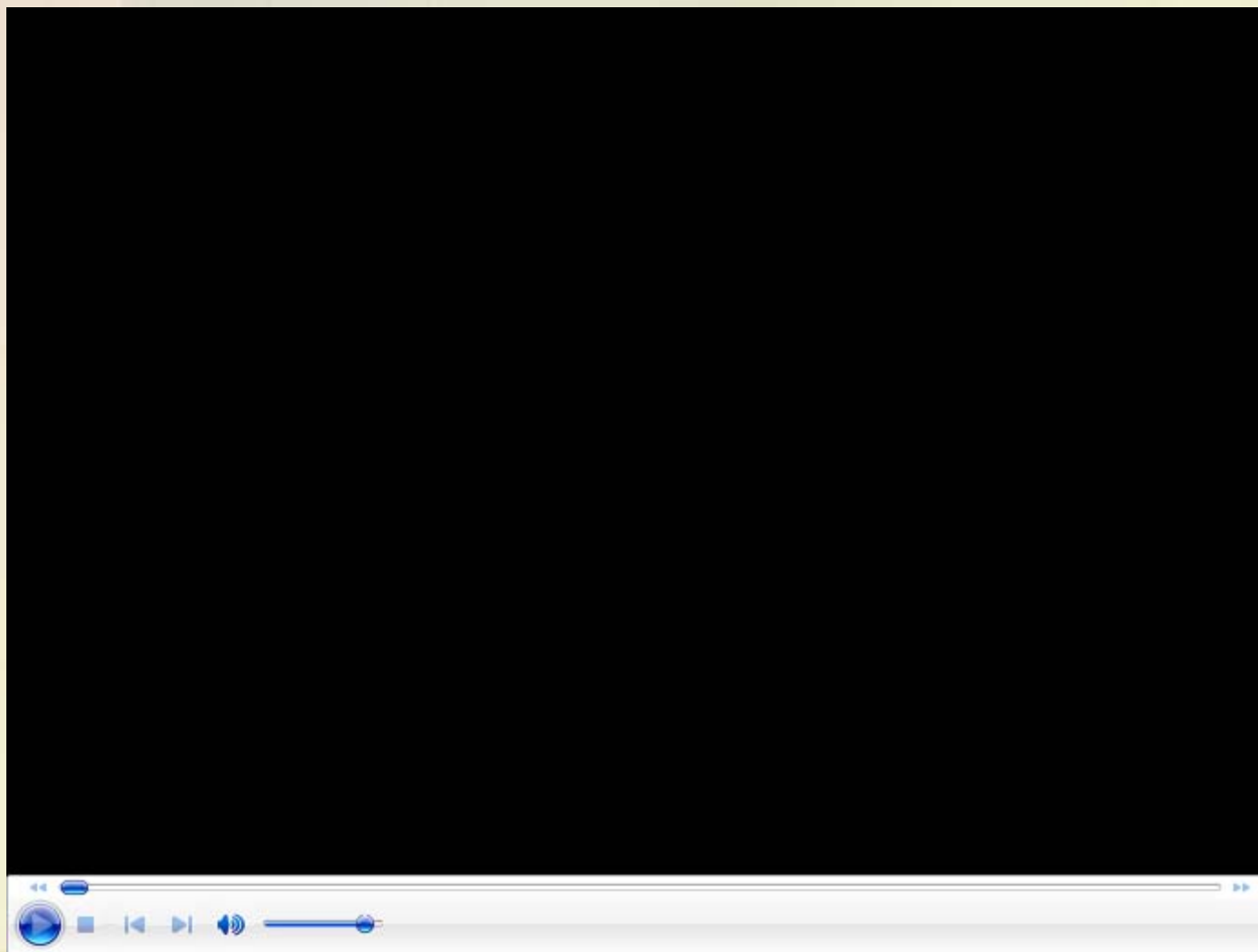
# トーキング・ドラムによる伝達

- ・ 高い音と低い音で、音声言語のトーンをなぞる
- ・ 条件がいいときは数十キロメートル先まで音が届く
- ・ 数千人の人の耳に入る可能性がある

# トーキング・ドラム（ロコレ）1



# トーキング・ドラム（ロコレ）2



# トーキング・ドラマの内容

- ・ 情報伝達的内容
  - 「〇〇が死んだ」
  - 「狩りに行こう」
- ・ しょーもない内容
  - 「腹が減った！」 (“*Bototoloto! Bototoloto!*”)
  - 「朝から何も食っていない!」
  - 「毎日雨ばかりだ!」「雨降れ!」
- ・ たいへん興味深いことに、後者も「ボナンゴ」と呼ばれる



## 「ボナンゴ」における「投擲性」1/2

- ・ 発話は特定の相手に向けられておらず、明示的な受け手が存在しなくてもいい
- ・ 発話は通常、一方向的におこなわれる（対話的ではない）
- ・ (潜在的な)受け手は、発話に対する関心を表に表さない。せいぜい小さな笑い声を上げる程度。(cf. Goffman (1963) の「儀礼的無関心」)

## 「ボナンゴ」における「投擲性」2/2

- ・ 話し手の態度だけでなく、それを受け取る聞き手側の無関心も重要。(お互いにそれがわかってやっている)
- ・ 話し手は発話を投げ、受け手はそれを受け取らない → 「投擲的発話」

# ボンガンドの発話の位置

もちろん、われわれが通常おこなっている「会話」  
がないわけではないが

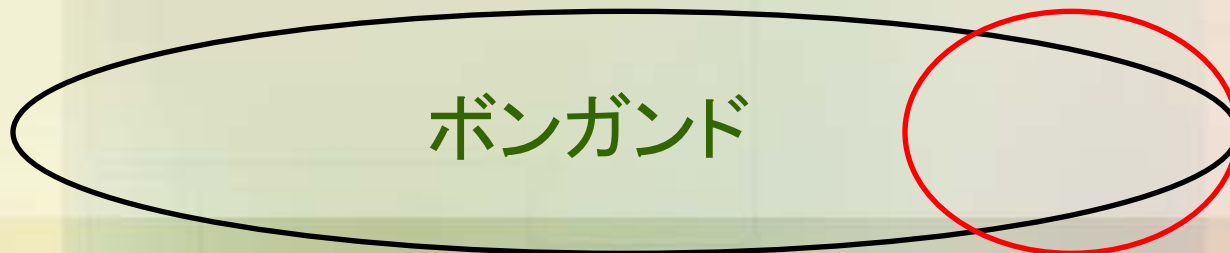
相手が  
定まっている  
(対話)



相手が  
定まっていない



ボナンゴ



# 「投擲的発話」の利点と欠点

- 聞き手と発話との関係性が断ち切られている → 発話のアドレス性, 責任を気にせずに好きなことが言い放てる (cf. 「王様の耳はロバの耳」)
- × アドレスをめぐるフレーム問題的な混乱が起こる可能性 (慣れてないと)
- × 対面的会話に比して, 相手を特定した細やかなインタラクションができない

## vs. 対話ドグマ dialogue dogma

- ・ インタラクションは「対話的」であるのが良いとしてしまうエスノセントリズム
  - 対話のパーティーは少数である
  - 音声的インタラクションは対面的に起こる
  - 対話は交互的であり(ターンテイキング), 沈黙は抑圧される
- ・ 「ボナンゴ」の記載はそれに対する反例(別の例: Heliwellのロングハウスの話, 川田の「シンローグ」)

# 伝達の二つのやり方

- ・ 受け手をきちんとアドレスしてその相手だけに伝える (ex. 神経系, 電話)
- ・ 情報そのものはブロードキャストし, その取捨選択は受け手に任せる (ex. ホルモン系・フェロモン系, ラジオ)

# 「音声」というモード（視覚と比して）

- ・ アドレス性が弱い（四方八方へ伝わる）
  - アドレス性を強くするための工夫
    - 視線や顔の向きによる補助
    - 名前を呼ぶ
    - ターン・テイキング
- ・ 伝達距離は長い，ものに遮られにくい
- ・ 口だけでおこなえる（手や体を使わなくてよい）

# 音声言語と視覚言語

- ・ なぜ人類において音声言語が主要な伝達手段となったのか？（視覚(手話)言語でも十分いけるにもかかわらず)
  - 手の使用の必要性？
  - 分節性の問題？
  - 見通しの悪いところ(森林など)での伝達の問題？



# ボナンゴとツイッターの類似性 1/2

ボナンゴについて発表すると「そういうことはツイッターで実現されていて珍しくない」というコメント(逆に言うと, ツイッターはボナンゴで実現されていた)

- ・ 相手のことをあまり考えない「つぶやき」(ボナンゴは大声だが)
- ・ 不特定多数に対して投擲される

## ボナンゴとツイッターの類似性 2/2

これらは、われわれの社会では音声的コミュニケーションにおいて抑圧されてきた。

インタラクション形態の「別の可能性」がインターネットによって開けた。(実はボンゴは昔からやってきたのだが。)

# ボナンゴ: 最近ネットで話題に

Twitter is Bonango is Twitter - 1] - Mozilla Firefox

http://togetter.com/li/6414

Tembea+ASCOM 新聞+天気 コンピュータ Sニュース 大学関係 その他 Gmail Google

TweetBuzz - インターネット連続講座 Togetter - 「Twitter is Bonango is Tw...

RT @imbeder: すんごいおもしろい。RT kureichi まさこ。RT @kdxn わかった。Twitterはボナンゴだ。我々はアフロ化しつつある。<http://www.africa.kyoto-u.ac.jp/lecture/kimura2/3.htm>

hisasimi 2010-02-17 19:42:11

読んでみます。著者がTwitterでいいかと思って探してしまいましたが、いいみたい。RT @kdxn 実数は数年前にその『共在感覚』(京都大学学術出版会)って本を読んだのですが、これ超おもしろいです。

kureichi 2010-02-17 19:48:42

この本ではコンゴのボンガンゴ人とカメルーンのバカ・ビグミーの二つの会話方法が研究されていて、どちらも我々の想定する対話と全然違うのでびっくりします。RT @kureichi: 読んでみます。

kdxn 2010-02-17 19:51:25

で、それらに共通する感覚として「共在感覚」というのを見出しているわけです。遠くにいる人と近くにいる人に、同時に会話する。それが、ボナンゴであったりキングダムであったりによって行われるのですが、この物理的距離と心理的距離の不一致はインターネットのかも。

kdxn 2010-02-17 19:53:29

バカ・ビグミーの場合は、人がたくさんいても沈黙がつづき一方、一人が喋りだすと場にいる人が一斉に話したし、それが一段落するとまた沈黙、みたいな様子がおもしろいです。monologueでもdialogueでもなく、multilogueあるいはomnilogue。

kdxn 2010-02-17 19:56:18

だね。インターネットでつながっている方が心理的距離が近いのは当たりまえと言えば当たりまえなんだけど、ここで面白いのは、独り言でもいってこと。純粋な独り言とは違ふけど。RT @kdxn この物理的距離と心理的距離の不一致はインターネットのかも。

kureichi 2010-02-17 20:07:33

で、いま目次見たら最終章でちゃんとインターネットや携帯を論じてるわw ということは、Twitterの登場はネットのあるべき方向への当然の進化と見ることもできる。RT @kureichi: インターネットにつながっている方が心理的距離が近いのは当たりまえと言えば当たりまえ

家に入れたiPhone4 (@ProfMatsuoka)のiPhone4電波感度問題に関するつぶやき 31 users

夜中における根源的倫理について(同性愛編) 45 users

ハワルの勤めぬ証 樹 174 users

—最近追加された商品—

ジャンプチェアピンク

ベベローション 360ml 3 users

インフォコムズ (講談社BIZ) 22 users

ゆちゃうす 1000 1箱12コ入×3パック【リンクルゼロゼロお試しサンプル付】 2 users

私にはもう出版社はいらないーキンドル・POD・セルフパブリッシングでベストセラーを作る方法~ 6 users

ウェブ国産カー一日の丸ITが世界を制す(アスキー新書 047) 17 users

—最近ログインしたユーザ—

トヨタ nissan 東映

# 無視することの技術

- ・ 新しいコミュニケーション形態の急激な立ち上がり
  - 携帯電話
  - インターネット（メール，掲示板，ツイッター…）
- ・ われわれはこれらのコミュニケーション形態に対して，文化的に成熟した「無視すること・切ることの技術」をまだ持ってない？

「共在感覚 –アフリカの  
アフリカの二つの社会にお  
ける言語的相互行為から」  
2003



つながることと切ること

コンゴ民主共和国、ボンガンドの声の世界

ご静聴ありがとうございました